愛知工業大学研究報告
第４６号　平成２３年

マッカラーズとウェルティの作品中の聾者

The Deaf in Carson McCullers's and Eudora Welty's Works

伊藤　泰子†
Yasuko Ito

Abstract　We can not find many stories described about deaf people. But I found only a few hearing authors used deaf characters in the 19th and 20th century. This paper shows the description about the deaf in both McCullers's and Welty's works. The two writers made use of the deaf-mute characters as the mirrors reflecting the readers' inside.

１．はじめに

20 世紀の聴者作家が主要登場人物として聾者を登場させた作品は筆者が探した限り、ほとんどなかった。そこで筆者が見つけた Carson McCullers と Eudora Welty の作品を、聾者を描いた 20 世紀聴者作家の作品として取り上げる。二人の作家のみで 20 世紀における聴者作家の聾者の描き方を一般化することは難しいが、数少ない作家の聾者への考えをまとめることで、聾者に対する社会の見方を知ることができるであろう。

19 世紀の聾者が登場する作品では、聾者は聴者の一般社会からの outcast という存在であった。そして、可哀想な聾者に聴者が救いの手をさしのべることを美談とした。20 世紀の２人の聴者作家が描く聾者は、聴者社会から孤立しているが、孤立の仕方が 19 世紀とは異なる。マッカラーズとウェルティは、聞こえないことを悪の印としてではなく、違いとしてみる。たとえばマイノリティが孤立するように、耳が聞こえないという違いを持つ人が聴者社会の中で孤立する。彼女たちは、聴者社会から孤立して孤独になる人物として聾者を登場させる。そして、文学作品の中には 19 世紀に引き続き聴者と聾者の間に hearing line は存在している。また、19 世紀のマーク・トウェインのように、聾者を笑いの種として扱い、聾者に対して親しみを持たせる手法も使われている。

すなわち、聾者を欠陥のある可哀想な人とみなし、彼らに救いの手をさしのべる描き方は見られないことが、20 世紀聴者作家マッカラーズとウェルティの大きな特徴である。

聞こえない人を表す単語は文学作品中にも表れているが、deaf and dumb から deaf-mute あるいは mute などが使われている。耳が聞こえないことと話せないことのどちらを重点に考えるかにより、言葉は使い分けられている。no voice, silence, mute などの単語を使って聞こえないことより話さない、声を出さないという点から、聾者は違いを持つ孤立した人間であると描かれている。たとえば、聾者を孤立した例として登場させ、孤独の象徴としている。

あるいは、声を出さないから言われたことが理解できないと解釈するのではなく、声を出さないで沈黙する状態は、言われたことを理解して納得した証拠とみなして、その聾者を賢い落ち着きのある人として称賛する。このように silence に対する見方が変わってきている。話せないことを馬鹿にする態度から、黙っていることは深く理解をしてることを示すとみなす見方に変わった。また、手話についても、手話を単なる身振り手振りではなく、言語として認め、聾者は手話言語を話す言語的少数派と考えられるようになっていく。つまり、聴覚に欠陥があるので聾者は劣っているという見方ではなく、異なる言語である手話を使うマイノリティであると見る。それは、縦方向の優劣の上下関係ではなく、横方向の平等な違いを持つ人々の社会での聾者としての立場を表すことになる。

電話の発明者のアレキサンダー・グラハム・ベル(1847-1922)は優生学者でもある。優生学者は人間を「正常」の範囲内にするように人間を改善することを考えた。すなわち、正常ではない人＝障害者という概念を生み出した。優生学の考えによって、正常範囲より逸脱している障害者は、できるだけ正常範囲内に入るように、そして負の個人差を減らすために努力を強いられることになった。従ってベルは 1920 年に聾者同士の結婚を禁止して、聞こえない子どもが生まれることをできるだけ避けようと主張する論文を発表している[1]。これは聾者に対してアメリカ聴者社会への同化を薦める考え方を表す。20 世紀後半には聾者にとっても公民権運動が影響を与えて、聾者は違いを持つ少数派であるという考え方に徐々に移行していった。この聾者に対する見方の変化によって文学の中の聾者の描かれ方も変化した。

２．Carson McCullers, *The Heart Is a Lonely Hunter* (1940)

1940 年、僅か 22 歳のマッカラーズ(Carson McCullers, 1917-1967)の処女作である小説 *The Heart is a Lonely Hunter* 『心は孤独な狩人』[2]に聾唖者が登場している。マッカラーズはジョージア州コロンバスの宝石商の家庭に生まれた。高校卒業後、ジュリアード音楽院に入学する予定でニューヨークに出てきたが、学費をなくしてしまい、コロンビア大学の夜間授業で創作のクラスをとることになった。1936 年からこの作品の原作 *The Mute* の執筆に取りかかり、1940 年に出版社からのアドバイスを受けてタイトルを変更して出版した[3]。

最初に、あらすじをまとめておく。シンガー(John Singer)は聾唖者（deaf and mute）で、彼は聾唖者のギリシャ人、アントナープロス(Spiros Antonapoulos)と共に生活していた。毎日、シンガーが手話でアントナープロス

†愛知工業大学　基礎教育センター　非常勤講師

に話しかけるばかりだったが、１０年間、２人にとっては幸せな生活だった。しかし、アントナプーロスが 200 マイル離れた精神病院に収容されてしまった。それ以降シンガーは下宿屋に引っ越し、ひとり暮らしを始めた。彼は毎日、ブラノン(Biff Brannon)が経営している食堂で食事をした。その食堂でジェイク(Jake Blount)や黒人医師のコープランド(Doctor Copeland)と知り合いになった。また、下宿屋の娘のミック(Mick) とも交流するようになった。いつしかそれぞれの人がシンガーに話を聞いてもらうようになった。シンガーが穏やかに話を聞くので誰もがシンガーは自分の話を理解してくれると思っていた。しかし、シンガーは実は理解しているわけではなく、彼はアントナープロスのことだけしか考えていなかった。ある日、シンガーがアントナープロスの病院を訪問すると、彼は亡くなっていた。下宿に戻ったシンガーはピストル自殺をする。シンガーの死後、ジェイクは町を去り、コープランドは病に倒れる。ミックは家計を助けるためにデパートで働き始める。そして、ブラノンは相変わらず、食堂を続けた。

２・１　先行研究分析

石田(1983)は４人の登場人物の関係はシンガーを中心に放射線状にのびていると考え、自分自身の理想やありのままの自分の姿を現実の世界で実現させることができない人間群、および彼らの生き様をマッカラーズはテーマにしていると述べている。また、シンガーはアントナープロスを「愛する人」であると同時に、４人の登場人物から「愛される人」であった。シンガーを含め、全員が愛するが故に孤独であり、彼らの孤独は運命づけられており、その運命の中で彼らは生きるしかないことをマッカラーズは描いているとしている[4]。井上(1992)はマッカラーズのテーマは孤独と愛であることは確かだが、神を失った現代人の孤独感を人間の弱い愛の力ではぬぐい去ることはできない状況を描いているとしている[5]。江口(1958)は、マッカラーズがこの作品の中で語っているのは、人間が互いに心を通わせようとする企てのむなしさであり、その挫折から深められる孤独であり、またそのため人間の犯す錯覚や愚かさの笑えぬ悲哀なのであろうと分析している[6]。

では、孤独と愛のテーマの作品に聾唖者をなぜ登場させたかと思われるが、彼らの評論ではその点は問題視していない。ただ、さまざまな異なる登場人物の一人として登場させていると考えられるようだ。

ところが、マッカラーズの自伝によれば、この小説の構想は南部の町の或る男性にいろいろな人たちが話にやってくる話で、その男の名前は、最初はジョン・ミノヴィッチで、次はハリー・ミノヴィッツというユダヤ人になったそうだ。ところが、ある日、急にジョン・シンガーという聾唖者がひらめいたそうだ。彼女は母にそれを話すと、母は「いったい何人の聾唖者を知っているというの？」と尋ねた。彼女は「一人も知らないけれど、でもシンガーのことは知っているわ」と言ったそうだ。つまり、聾唖者という設定は突然ひらめいたにすぎないことになる[7]。

しかしながら、筆者は聾唖者を登場させた理由を考えながら、この作品を聾者の観点から見ていきたい。マッカラーズは、人間は自分を理解してもらいたいという自己中心的な思いで一方的な話しかけをしていることを、聾唖者を聞き役として使って表したと筆者は考える。また、シンガーとアントナープロスのように、手話を使って心を通わすことができる聾者と比べて、聴者が音声言語を使っても心を通わすことができない愚かさと悲しさを表したと筆者は考える。

２・２　“mute”

シンガーは自分を聴者に紹介するとき、メモ用紙に I am a deaf-mute, but I read the lips and understand what is said to me. Please do not shout. (本文 55 ページ：以下は本文のページ数のみ示す)[8]と書いて deaf-mute という単語を使っているが、物語の初めは In the town there were two mutes, and they were always together.（下線は筆者による）から始まり、唖者 mute という単語をマッカラーズは使っている。また、この小説の最初のタイトルは、*The mute* であったことから、マッカラーズは耳が聞こえないことではなく、話せないこと、あるいは話さないことを重視していたと考えられる。

ところで、このタイトル *The mute* は mute を「唖者」と考えるとシンガーだけを意味するとも考えられるが、mute を形容詞と考えると「唖者たち」になり、もちろん、シンガーとアントナプーロスの二人を示すことになる。しかし、聾者の二人だけでなく、そのほかの登場人物も全員が唖者であると筆者は考える。なぜなら、彼らは自分の心の内をシンガー以外の他人に話さない人たちだからである。聾者の二人は身体的に唖者であるが、その他の登場人物（ミック、ジェイク、コープランド医師、ブラノン）は身体的な唖者ではないが、心の内を語らない唖者の立場であると考えられる。

ギリシャ人アントナープロスは、食べることが好きな太った半開きの目と口で優しそうな微笑みを浮かべている(3)。頭の足らなそうに見えるが親しみがもてる聾唖者である。それに対して、ユダヤ人かもしれないシンガーは、賢そうに見えて、口唇法で何を言っているかがわかるというアントナープロスとは正反対の聾唖者である。しかし、シンガーはアントナープロスと出会ってからは手話でアントナープロスと会話できたのでそれ以降は声を出さなくなった(11)。彼らも聴者に自分の内面を語ろうとする人ではなかった。

次に、ミック、ジェイク、コープランド医師、それぞれのシンガーに対応する場面を取り上げて、それぞれが自分の声を出せない mute の立場であったこと、そして、それぞれがシンガーを劣った聾唖者としてではなく、賢く穏やかな神のような、自分を理解してくれる存在として、自分の声を聞かせていたことを示す。ミックは家が貧しいので自分の夢を言い出せない。ジェイクもまともな仕事に就くことができない失業者で社会への不平や批判を口に出しても受け入れてもらえないので沈黙するしかない。コープランド医師も黒人問題に対して声を出して主張したいが、公言はできない。彼らは社会的弱者の立場からの声を出すことができない mute であったが、シンガーに対してのみ、自己主張を聞かせた。

まず、ミックは神を愛したことも人を愛したこともない頑固で気が強い子だった。また、彼女はいつも物事を人に打ち明けないたちだった。しかし、無言なシンガーを神とまで思うほどだった。

> You haven't never loved God nor even nair person. You hard and tough as cowhide. (51) She had always kept things to herself. That was one sure truth.(52)
> Everybody in the past few years knew there wasn't any real God. When she thought of what she used to imagine was God she could only see

> Mister Singer with a long, white sheet around him. God was silent— maybe that was why she was reminded. (119-120)

ジェイクは周りの人にしゃべりまくるが誰にも理解されず、ジェイクもシンガーだけが自分を理解してくれていると思っている。

> “You get it,” he said in a blurred voice. "You know what I mean.”(69)

黒人に対する人種差別に怒るコープランド医師もシンガーの穏やかさを認めている。コープランド医師はシンガーが他の白人とは異なると思った。彼の話を聞く表情は、穏やかで弾圧された民族のことを知っているような様子が伺えたと描かれている。また、シンガーがコープランド医師と一緒に黒人のところに往診に行ったときも、シンガーはすべてをよく見て理解した。おとなしく礼儀正しいので、患者の妨げになることもなかったと、シンガーの対応をまるで神のように見ている。

> He remembered the white man’s face when he smiled behind the yellow match flame on that rainy night— and peace was in him.(90) He was a wise man, and he understood the strong, true purpose in a way that other white men could not. He listened, and in his face there was something gentle and Jewish, the knowledge of one who belongs to a race that is oppressed. Mr. Singer walked behind him and watched and understood. Because of his quietness and decorum he did not disturb the patients as would have another visitor (135).

それぞれがシンガーの部屋に来て彼に話をする。彼らにとって、シンガーの存在が必要不可欠である。しかし、シンガーは彼らにどこへ行っていたかなど、自分については全く話さない。彼は３度目にアントナプーロスの病院訪問をする時はドアに「数日、仕事で留守にする」と書いた貼り紙を貼った。しかし、「仕事で」と嘘を言って、自分自身を見せない。このように、彼らとシンガーの間には全くコミュニケーションは成立していない。シンガーにとっては彼らの存在は必要不可欠とは言えない。心を通わすためにはお互いの理解が必要だが、彼らはシンガーを彼ら自身の理解者として利用するが、彼らはシンガーを理解しようとはしない。シンガー自身も彼らとの間にある hearing line を乗り越えようとする気はない。

> One by one they would come to Singer’s room to spend the evening with him. The mute was always thoughtful and composed. His many-tined gentle eyes were grave as a sorcerer’s. Mick Kelly and Jake Blount and Doctor Copeland would come and talk in the silent room— for they felt that the mute would always understand whatever they wanted to say to him. And maybe even more than that (94). On his door he tacked the same sign he had posted there before, stating that he would be absent for several days on business (320).

シンガーは、はじめは彼らの話が理解できなかったが、しばらくするとわかるようになった。なぜなら、いつも彼らの話の意味は同じだったからだと書かれている。これはシンガーが一語一句すべて口の形を見て読み取れるようになったということではなく、彼らはいつも自分勝手な自分自身の話ばかりしているので、その点については「いつも話が同じ」ということになるのであろうと考えられる。

> At first he had not understood the four people at all. They talked and they talked— and as the months went on they talked more and more. He became so used to their lips that he understood each word they said. And then after a while he knew what each one of them would say before he began, because the meaning was always the same (205-206).

その後、偶然３人が同じ時間にシンガーの部屋に来たことがあった。そのとき、彼らはお互いにはほとんど何も話さず、いつものようにシンガーに対して話したい様子が見られた。結局、その日はシンガーに話を聞いてもらえないと思い、それぞれが帰っていった。

そのときの様子をアントナプーロスへの手紙の中でも客観的にシンガーが見ている。彼らは皆、知らない町からやってきた人のように、他人の気持ちを無視するような失礼なこともしたとまで言って、彼らが自分の殻に閉じこもって、自分について他人に伝えようとしない、声を出さない人であることを示している。彼らはそれぞれが自分についてシンガー以外には他人に伝えることができない mute であったことを示す。また、シンガーに対しては、神の前で懺悔するようにシンガーに話を聞いてもらうことを要求していたにすぎないと考えられる。

> Each person addressed his words mainly to the mute. Their thoughts seemed to converge in him as the spokes of a wheel lead to the center hub (211).
> They all came to my room at the same time today. They sat like they were from different cities. They were even rude, and you know how I have always said that to be rude and not attend to the feelings of others is wrong. So it was like that (216).

２・３　聾者の立場

また、初めの場面は、二人の聾唖者が聴者からは分離して彼らだけの世界で満足して暮らしている場面になっている。彼らには聴者社会から追放された暗いイメージはない。物語の初めの部分には単調な毎日ではあるが幸せな暮らしぶりが描かれている。朝も夕も一緒に仕事場に行き帰りした。週に１度、図書館に本を借りに寄り、金曜日の夜には二人で映画を見に行った(3-4)。二人にとっては、分離された聾者の世界の暮らしが幸せに感じているように描かれている。聾者が聴者社会に所属できることが幸せを意味するのではなく、聴者社会からは分離している聾者社会で生きることが実は聾者にとっては幸せだとマッカラーズは暗示していると筆者は考える。

二人には他には友達がいなかった。仕事場以外では彼らはいつも一緒だった(5-6)。マッカラーズは聾者と聴者の間には境界線を示す hearing line が存在することを認め

てはいるが、聾者の聴者への同化を勧めているわけではないと考えられる。劣っている者は平均値に近づくよう努力することが社会全体のレベルアップになり、良い社会になるという考え方の優生学的考え方からすれば、劣っている聾者が聴者に近づくように努力することによって聴者社会に所属できることが聾者にも聴者にとっても幸せなこととなる。言い換えると、聾者が聴者社会へ同化するよう努力することを意味する。しかし、「同化主義と排外主義は表裏であって、同化は優越感・劣等感を再生産し、同化したにもかかわらず、差別を増幅させる[9]」と弁護士の大谷(2000)の言葉のように、シンガーとアンントナープロスだけの聾唖者の社会に所属している方が幸せであると思えることも確かであろう。

シンガーは聾学校で手話と口話の両方を学んだ。しかし、口話の訓練は努力したが、声を出すとおかしな声が出ると思って声を出すことを好まなかった。苦労して発話を身につけようとする努力家である。しかし、自分の言いたいことを十分に表すことができたのは手話だった(11)。つまり、シンガーは声を出すことに努力した結果、本当は声を出すこともできたが彼は唖者であることを選んだと言える。さらに言えば、シンガーは聴者社会ではなく、聾者社会に所属することを選択したと理解できる。

> He could never become used to speaking with his lips. It was not natural to him, and his tongue felt like a whale in his mouth. From the blank expression on people's faces to whom he talked in this way he felt that his voice must be like the sound of some animal or that there was something disgusting in his speech. It was painful for him to try to talk with his mouth, but his hands were always ready to shape the words he wished to say.(11)

シンガーは聾学校に置き去りにされた孤児である(11)ことは、周りに聴者の親のような聴者社会と彼を結びつける人がいなかったから、マッカラーズはシンガーを聾者社会の人間として設定したと筆者は考える。シンガーはこのような条件から、聾者社会に生きることを心に決めていたが、アントナプーロスが病院に入ったために、アントナプーロスとの二人の小さな聾者社会はなくなった。そのため、シンガーは初めて聴者との人間関係を求めて下宿に引っ越した。それは孤独を感じたシンガーが聴者社会へ所属することで孤独から逃れようとする行動を意味するであろう。

> Singer recalled that, although he had been deaf since he was an infant, he had not always been a real mute. He was left an orphan very young and placed in an institution for the deaf. He had learned to talk with his hands and to read. Before he was nine years old he could talk with one hand in the American way—and also could employ both of his hands after the method of Europeans. He had learned to follow the movements of people's lips and to understand what they said. Then finally he had been taught to speak.(11)（下線は筆者による）

シンガーはアメリカ式とヨーロッパ式両方の手話をマスターしたと書かれている。マッカラーズが手話について知識を得たことがわかる。しかし、マッカラーズの周囲に聾者の存在はなかったので、世間で人種、ジェンダー、失業、貧困などの問題と同様に、聾者が話題にされていたので、マッカラーズの頭に聾者の登場人物がひらめいたのかもしれない。

19 世紀後半からアメリカではアレキサンダー・グラハム・ベルの主張を中心に口話法教育が広がっていった。1867 年にニューヨークにレキシントン聾学校がアメリカ初の口話法で教育する学校として開校して以来、さらには 1880 年[10]以降、口話法教育の聾学校が増えた。（安藤による数字を入れる）しかし、聾者たちの結束は強かった。各地域にろうクラブ(Deaf club)があり、レナード(1999)[11]も聾者の両親が毎週日曜日の午後に彼をニューヨークのろうクラブに連れて行ったと書いている。パッデンとハンフリーズによれば、ろうクラブは民族や人種で分かれていて、20 世紀初期には聾者の移民がアメリカでの生活に慣れるための手助けをするほど、聾者の間に浸透していた(108)。シンガーが書いたアントナプーロスへの手紙の中で聾者団体の大会への参加を話している。ジョージア州メイコン(Macon)で大会が開催されるから一緒に参加しよう(213)と書いている。

たとえば、1913 年には全米ろう協会(National Association of the Deaf)の会長ジョージ・ヴェディッツ(George Veditz)が手話映画の撮影のために行った講演で「手話は聾者が地球にいる限り存在する。神に与えられた最も尊い贈り物だ」と述べ、口話法に押される手話の保存を訴えた(98)。アメリカの聾者たちは 1880 年から 3 年ごとの全米ろう大会を開催し続け、1934 年には第１７回大会がニューヨークで、1937 年には第１８回大会がイリノイ州シカゴで開催された。1937 年の大会ではルーズベルト大統領が聾者は聴者より劣っているのではなく、聴者と異なっているだけであるので、聾者を国家公務員に採用することを約束した[12]と報告しているので、聴者社会でも話題になっているはずだ。それで、マッカラーズは作品に聾者を登場させたとも想像できる。

以上のように、マッカラーズがこの作品を書こうとしていた 1930 年代後半にはアメリカの聾者たちはパワーを持っていた。Van Cleve[13]によると、特に印刷業者は多くの収入を得ていた。たとえば、1923 年の調査によると、聾者の印刷業者は週に 28 ドル 50 セント稼いでいた。1930 年代の大恐慌の時でさえ、週に 60 ドル稼ぐほど、経済的にも安定した人たちが多くかったことも聾者パワーにつながっていたであろう。

すなわち、マッカラーズはシンガーを当時の聾者コミュニティの一員として描いている。マッカラーズは、現実に聾者コミュニティのパワーが大きくなってきている時期を描いている。人種問題と同様の社会問題となる聾者パワーを予言していると言えるのではないだろうか。

また、コープランド医師が「黒人の歴史はユダヤ人の歴史に匹敵する（299）」と言いながら、シンガーが名前からも言えるが、シンガーはユダヤ人だと思う(300)と断定している。黒人のコープランド医師は、シンガーを白人という立場より、むしろ聾唖者の立場の人間と思っていることがわかる。この点はマーク・トウェインの『ハックルベリーフィンの冒険』に登場する黒人ジムの場合と同様に、コープランド医師が人種の壁（color line）を乗り越えるよりたやすく hearing line を乗り越えたことを象徴すると考えられる。

> "The Jew and the Negro," said Doctor Copeland bitterly. "The history of my people will be

> commensurate with the interminable history of the Jew — only bloodier and more violent.(299)
> "Mr. Singer is a Jew." "No, you're wrong there." "But I am positive that he is. The name, singer. I recognaized his race the first time I saw him. From his eyes." (300)

２・４　シンガーの自殺

シンガーが３度目にアントナプーロスの病院訪問をしたとき、彼はアントナプーロスが亡くなったことを知らせる紙を読んだ。文字は冷淡に情報提供する手段である。音声言語や手話のように、人の感情があまり含まれない。それも一因かもしれないが、シンガーのそのあとの行動は驚きと衝撃で呆然としているが、落ち着いているようにも見受けられる。

> He looked at the note a long time, his eyes cut sideways and his head bowed. For it was written there that Antonapoulos was dead.(324)

シンガーは自宅に戻り、アイスコーヒーを飲み、たばこを吸い、灰皿とグラスを洗い終わってから、ピストルを自分の胸に向けた(326)。シンガーの自殺の理由については何もマッカラーズは書いていない。なぜ彼は自殺したかを考えると、一つには、シンガーがアントナプーロスの象徴する聾者社会に戻るため自殺したと筆者は考える。シンガーはアントナプーロスが病院に入ったので孤独から逃れるために聴者社会に入ってきたが、聴者社会では彼の居場所はなかった。彼はアントナプーロスと共にすごすために自殺したと考える。また、シンガーは聴者社会ではなく聾者社会を選択したと考えられる。最終的にシンガーも孤独から逃れるためにはアントナプーロスとの二人の聾者社会に戻るより他はなかったのでシンガーは自殺したと見ることもできる。

聾唖者シンガーが主人公の物語であったら、シンガーの自殺が結末となるはずである。また、自殺理由についても十分に描かれるはずである。しかし、この話はシンガーの自殺後の他の登場人物の様子が、かなり多く書かれていることからみると、マッカラーズが描きたかった主人公は聴者たちであり、聾唖者シンガーについて描こうとした作品ではないと言えるだろう。

シンガーの自殺後のミック、コープランド医師、ジェイクについて次のように描かれている。

ミックにとってシンガーが無言であることがシンガーを魅力的に思わせた。そして、ミックはシンガーに恋心を持つ。階段下で座ってシンガーが出てくるのを待っている。シンガーが自殺したあとには「恋が終わった(357)」と表現されている。ミックはシンガーと接することで、自分の殻に閉じこもるのでなく、音楽を通して他人とのコミュニケーションを持とうと思うようになっていくはずだった。ところが、シンガーの死によって孤独な自分に戻されることになった。家に帰ると再び「内の世界」に入るようになることがそれを示す。

コープランド医師はシンガーが自殺したことで、悲しみが残った。彼はシンガーを信用していたので、不可解な自殺のために、よりどころを失ってしまった。

> But truly with the death of that white man a dark sorrow had lain down in his heart. He had talked to him as to no other white man and had trusted him. And the mystery of his suicide had left him baffled and without support. There was neither beginning nor end to this sorrow. Nor understanding (333) .

ジェイクはシンガーの自殺に対して怒りを感じた。なぜなら、彼がシンガーに話した思いがシンガーの死と共に失われたように思ったからだ。シンガーは気が狂ったのだろうかとも思うが、彼は話す人もいなくなり、孤独になった。

> Singer was dead. And the way he had felt when he first heard that he had killed himself was sad — it was angry. He was before a wall. He remembered all the innermost thoughts that he had told to Singer, and with death it seemed to him that they were lost (341). He could not be seen or touched or spoken to, and the room where they had spent so many hours had been rented to a girl who worked as a typist. He could go there no longer. He was alone (342).

２・５　笑いの種

物語の中でシンガーとアントナプーロスは時々、金曜日の夜には映画を見に行く、という表現がある。無声映画の頃は聾者も聴者と一緒に映画を楽しんだ。チャーリー・チャップリン(1889-1977)の『モダンタイムズ』は 1937 年であるので、マッカラーズが見ていないとは言えない。俳優が声を出さないで観客にストーリーを理解させ、感動を与える映画は、音声言語によるコミュニケーションが最大に理解される手段ではないことを表す。チャップリンは笑いの種として声を出さない無声映画を使った。彼は聴者であるが、身振り手振りや表情が言葉以上に伝えることを知って、笑いのために無声映画を選んだのであろう。

実際にチャップリンと親しかった俳優でもある聾者が彼の映画に影響を与えていた。グランヴィル・シーモア・レドモンド(1871-1935)は２歳半の時に猩紅熱が原因で耳が聞こえなくなり、カリフォルニア聾学校に通い、画家となった。チャップリンは彼の絵が好きであったことから親しくなり、『犬の生活』(1918 年)『黄金狂時代』(1925 年)に俳優として出演している。サイレント映画だったので、聾者も聴者同様に活躍できた。チャップリンの作品にはレドモンドが教えたアメリカ手話や指文字が使われている場面があることからもレドモンドのチャップリンへの影響がわかる。『モダンタイムズ』に登場するチャップリンは正常ではない。オートメーション化した工場で働くことは競争社会で生き抜くことを意味する。他の人のスピードに合わせて普通に労働することができないチャップリンは劣った人間、つまり失格者となる。障害者も貧しい人も社会からはじき出され、アウトサイダーと見なされるが、彼らが笑いの種になることで、人びとは彼らを悪い人間とみなすのではなく、コミカルな人として快く受け入れる。シンガーの相棒の、食べることが好きな頭の足らない太った親しみがもてる聾唖者アントナプーロスがまさに、笑いの種として描かれている。

２・６　まとめ

この中でのシンガーの役割は、「シンガーを中心に放射

線状に他の登場人物が存在する」ように、シンガーはハブ（接続部）の役割にすぎないと石田(1983)は述べている[14]。では、ハブの役割をなぜ、聾唖者にしたのかということが疑問となる。マッカラーズは、音声言語で心を通わすことができない人びとの間に、音声言語を使わないで心を通わす方法を求めて、聾唖者を登場させ、チャップリン風に人びとに愛を与えたかったのではないかと推測される。しかし、現実は神ではない聾唖者シンガーは人びとを孤独から救うことができるほどの愛の持ち主ではなかったとマッカラーズは結んだと筆者は考える。シンガーは救い主イエスのように人びとを孤独から救うことはできなかった。井上(1992)によれば、シンガーの自殺は神が人びとを孤独から救出しなかった、言い換えると神が人間を見捨てたことを意味する。

心が通じ合う最高のコミュニケーション手段が音声言語ではないことは、しゃべり続けるジェイクが人びとに理解されないことと同時に、話せないシンガーが自分の話を聞いてくれて理解してくれる人だと周囲の人たちに思われることによって、マッカラーズは示している。ところで、盲ろう者の福島(2009)の言葉は人間にとってのコミュニケーションの重要さを伝えている。「見えなくて聞こえない状態でも、他者とのコミュニケーションがあれば生きていけるな、という実感をもったということと同時に、もしかするとその逆の場合、つまり見えて聞こえるけれど他者とのコミュニケーションがうまくできないという状態は、生きていく上で非常につらく、厳しい状況なのではないかと考えるようになりました[15]」と語っている

また、シンガーという名前は「歌う人」でありながら歌えない、皮肉的な名前である。しかし、歌い手が人びとをつなぐ役割をするということは、マッカラーズは音楽が音声言語よりも人びとの心を通わす手段になることを期待してシンガーという名前を選択したように思われる。チャップリンの映画は音声言語ではなく、ＢＧＭとなる音楽が場面の状況を説明し、内容を話している。同様に、マッカラーズは音楽が人びとの心をつなぐものである、あるいは音楽が人びとの孤独感を癒すと主張したかったのではないだろうか。

聾唖者、ギリシャ人、黒人、子供、女性、貧困者など、登場人物はすべてが弾圧されたマイノリティの弱者でありうる。マッカラーズは聾唖者をマイノリティの一例として提示して聾唖者に様々な人の公言できない内なる声を聞く役目を与えた。聞くだけで自分の言葉を言わない役目を聾唖者に与えたと言えるだろう。

３．Eudora Welty, “*The Key*”

Eudora Welty(1909-2001)が短編集 *A Curtain of Green and Other Stories*(1941)に入っている “T*he Key*” を発表したのは、マッカラーズの *The Heart Is a Lonely Hunter*(1940)とほぼ同時期である。「鍵」は、小さな駅の待合室を舞台として３つのタイプの人々を描写している。まず、あらすじをまとめておく。deaf couple（聾者夫婦）のアルバートとエリー・モーガンと、よそ者の若者と、そのほかの人々が駅の待合室にいる。ナイアガラの滝に行く列車に乗り遅れた二人は次の列車を待合室で待っている。赤毛の若い男はひとり、壁際に立って何回も鍵を気晴らしに投げている。彼はこの町ではよそ者のようだ。彼は鍵をとりそこなって床に鍵を落としてしまう。聾者夫婦以外は落ちた鍵の金属音にびっくりして顔を上げる。その鍵はアルバートの足元に落ち、アルバートはその鍵を拾ってしばらくすると自分のポケットに入れる。若い男はアルバートに自分の鍵だと言わずにアルバートを観察している。すると、アルバートとエリーは手話で会話し始める。その時、初めて待合室にいた人は彼らが聾者であることに気付く。その後、若者はポケットに持っていたもう一つの「スターホテル２号室」の鍵をエリーに手渡して待合室を出て行く。

筆者は作品分析を通して、ウェルティが聾者を登場させた「鍵」を書いた理由を考察していく。

３・１　聴覚への注目

ウェルティは自分の生い立ちについて講演している。その内容は聾者を登場させた理由につながる点がある。そこで、まず、ウェルティの自伝を取り上げる。ウェルティの自伝[16]には出来事を年代順に記すのではなく、Listening, Learning to see, Finding a voice というタイトルを付けた３つの章から構成されているという特徴がある。自伝には、幼児期に周りの音や声を聞いたことを、次に８歳頃に家族で夏期旅行に出かけて見たことを中心に、そして最後の章は大学生活や卒業後の就職とプロの作家になるまでのことが書かれている。まさにウェルティが聴覚や視覚を彼女自身の成長のキーワードとして考える点が聾者を登場させる物語の「鍵」につながったと考えられる。

３・２　無声映画と文学

ウェルティは家族そろって少なくとも週に１度は映画を見に行き、バスター・キートン、チャーリー・チャップリンなどにすっかり入れ込んで笑い転げた。彼女が喜劇を手がけるきっかけになったのは、明らかに無声映画の古めかしいパントマイムに触発されたからであると自伝に述べている[17]。このように無声映画を通して音声言語を使わず、声を出さないで主張できることをウェルティは知っていた。たとえばチャップリンの無声映画のように、笑いを通して語られた社会問題にも触れたと考えられる。

また、彼女の父親は保険会社の社長であったため裕福な生活環境であった。幼い頃から両親は彼女に数多くの本を与え、読む楽しみを与えた。彼女はかなり早い時期に「愛すべきマーク・トウェインの作品に出会えた」と書いている。また、彼女の母が実家から持ってきたディケンズ全集も書棚にあった[18]。マーク・トウェインやディケンズも聾者を登場させた作品を書いていたので、ウェルティは本を読むことを通して聾者について知識を得ることができたと推測される。

３・３　社会問題

ソーントン不破直子(1988)によれば、ウェルティは 1930 年にニューヨークのコロンビア大学大学院ビジネススクールに入学し、広告学を専攻した。しかし、楽しいニューヨークでの生活も一年で終わった。大恐慌後の不景気のためにニューヨークで定職を見つけることができず、また、父が 52 歳の若さで急死したために、ウェルティは 1931 年に帰郷し、広告学を生かす職に就いた。1935 年、アメリカ合衆国政府は大恐慌後の極度の失業者増加対策として、WPA(Works Progress Administration)と呼ばれる制度を発足させたが、彼女はミシシッピー州にこの制度が導入されるとすぐに、ミシシッピー州の「下級広報官」(Junior Publicity Agent)の職を得た。彼女は広報活動のために州内 82 郡のほとんどを巡ってあらゆる階層の、あ

らゆる年齢の人びとに会った。しかし、1936 年にフランクリン・ルーズベルト大統領の再選が決まると、ミシシッピー州の WPA は廃止となり、ウェルティは失職した。そしてちょうどその年に、彼女の短編小説が初めて出版された[19]。ウェルティの人生から見ると、物語の中で社会問題を考える書き方は、家庭で読んだマーク・トウェインやディケンズなどの影響だけでなく、実際の体験から生まれたことがわかる。

ウェルティはエッセイ[20]の中で、作家は物語の中で社会を改革しようとするのではなく、人間について書くべきであるという考えを基に社会問題を扱う物語を書いていると主張している。その観点から見ると、ウェルティの「鍵」は待合室という小さな社会の中の人間を描いている短篇である。作者は待合室に待つ人びとの問題を解決しようとすることはなく、問題を持ったそれぞれの人間の心の奥底までを状況描写として描いている。聾者を含む様々な社会的背景を持った登場人物を通して、ウェルティはさまざまな人間を描いている。

３・４　マイノリティ

「鍵」は短編集『緑のカーテン』の１作品である。短編集には「饒舌」の文体の作品が多いのに対して「鍵」は「沈黙」の作品として目立つとソーントン不破直子は述べている[21]。しかし、「沈黙」の作品とするために聾者を登場させたにすぎないのだろうか。ウェルティが WPA の仕事に従事していたとき、多くの人びとと出会った。その中に、聾者と出会った可能性は十分にある。そのときに聾者は声を出さないが彼らにも主張があることを知ったと筆者は考える。

河内山(2004)は、南部小説に登場するマイノリティは、黒人を筆頭とする少数民族、未成年の子ども、若者に加えて、高齢者、身体に障害がある人などのいわゆる社会的弱者をも含めている。彼らはしばしば社会の疎外者であり、孤独であるという共通点がある。したがって、彼らを描くことはそれぞれの読者が本来持ち合わせている疎外感、孤独といったものを浮き彫りにすることになる。作品に登場するマイノリティを通して、読者は自分自身の心の奥底を見つめることになると述べている[22]。

「鍵」の待合室には社会のマイノリティ、すなわち①言語的少数派の聾者夫婦と②よそ者と差別された少数派の立場の若者と③多数派の立場になるその他の人たちがいる。

> Among the others in the station was a strong-looking young man, alone, hatless, red-haired, who was standing by the wall while the rest sat on benches(161)[23].

彼らの三者三様の社会的立場が足下に落ちた鍵をきっかけに浮き彫りにされる。まず、聾者夫婦は鍵をめぐって手話で話し始め、周囲とは切り離された世界を作る。それによって手話がわからない待合室の人たちは、自分たちの入っていけない世界を知り、さらには若者だけは聾者夫婦の会話を理解しているように思える。

> In quick mumblings from bench to bench people said to each other, “Deaf and dumb!” How ignorant they were of all that the young man was seeing!……Everyone stared at his (=the deaf husband) impassioned little speech as it came from his fingers. They were embarrassed, vaguely aware of some crisis and vaguely affronted, but unable to interfere; it was as though they were the deaf-mutes and he the speaker.(163-164)

また、少数派によって多数派の自分たちが疎外される逆転した立場を、待合室の多数派の人たちは実感することが上記の本文からわかる。手話でコミュニケーションする聾者夫婦の描写は、ウェルティが聾者は手話言語を話す言語的少数派であると認めていることを示す。また、聾者を、話せない人、つまりコミュニケーションができない劣った哀れな存在であるという考え方は逆転する。手話を理解できない聴者である多数派は聾者より劣った人たちになる。この待合室の中では聴者は突然、少数派の聾者が優位であることを実感させられる。このような少数派と多数派を逆転させる見方や、聾者を言語的少数派として見る見方をウェルティは持っていたと言えるであろう。

河内山(2004)は、若者は足下に落ちた鍵が聾者夫婦の夫、アルバートにとって何か非常な喜びを与えたことを見て取った、だから妻エリーに「安っぽい哀れみの情」から別の鍵を手渡したのだと分析している[24]。筆者は、若者と聾者夫婦は共にマイノリティであるにもかかわらず、若者は妻に対して哀れみの情から鍵を渡したと理解する。しかし、そのあと若者は、哀れみをかけることは聾者の上位に立つ行動であると気づき、いきなり出て行ってしまったと推測する。ウェルティは、聾者に対して「哀れむべき存在」というイメージを否定するためにこの作品を書いたと考える。聾者もそのほかのマイノリティも「哀れむべき存在」ではない。むしろ、彼女の作品の中ではマイノリティとしての存在が現れてきたと言える。

３・５　コミュニケーション

音声言語を使えない聾者は聴者とコミュニケーションがとれないために、聴者に対して劣等感を感じる。しかし、この待合室では手話がわからない聴者が聾者の会話が理解できずに聴者は聾者に対して劣等感を感じる。待合室ではこのように聾者と聴者の立場が逆転して、これほど簡単にコミュニケーションの不成立が生じるのかと読者に実感させる。

聾者夫婦のアルバートとエリーの会話で、エリーがアルバートにナイアガラの滝の音をどうやって聞くのかと質問する。すると彼は「You hear it with your whole self. You listen with your arms and your legs and your whole body.(169)身体中で聞く」と答えている。たとえば、待合室の人たちの中で、よそ者である若者だけは身体で聴こうとしていた。彼は聾者夫婦が列車に乗り損なったと言っていた。

> In the station the red-haired man was speaking aloud — but to himself. “They missed their train!”(166)

その若者だけが聾者夫婦とコミュニケーションできたとウェルティは描いている。すなわち、手話を使う聾者を登場させて、音声言語によるコミュニケーションの危うさを、さらに言えば言葉を使ったコミュニケーションの危うさを指摘していると言えるだろう。

4．おわりに

本稿では、1940 年代初めにマッカラーズとウェルティの二作家が聾者を主要な登場人物として取り上げている理由は何かと考えてきた。この二作家はコミュニケーションと孤独をテーマにして作品を描いた。20 世紀になると、人びとは言葉が通じてもコミュニケーションがとれなくなり、人びとをまとめる力でもあった神の存在が薄くなり、お互いが孤独になった。一方、音声言語が使えずコミュニケーションができないと思われていた聾者たちは手話で心を通わせている状況があった。そんな聾者を通してマッカラーズとウェルティはコミュニケーションや孤独について考えることを提言したのであろう。そして、聾者は、音声言語がわからない哀れむべき存在ではなく、手話を使う言語的少数派であるとマッカラーズとウェルティは描いたと考えられる。

19 世紀 20 世紀の聴者作家の中には聾者を登場させて、鏡のごとく聾者を利用して、読者自身を映し出した作家が存在した。しかし、彼らは聾者自身の真の姿を読者に示してはいなかった。

参考文献

[1] Lennard J. Davis, *My Sense of Silence; Memoirs of a Childhood with Deafness*, p.7, University of Illinois Press, Chicago, 2000.
[2] 河野一郎訳『心は孤独な狩人』新潮文庫　1972..
[3] 吉岡葉子『南部女性作家論　ウェルティとマッカラーズ』旺史社 1999.
[4] 石田敏行「カーソン・マッカラーズ論」　pp.115-122,『人文紀要　第２類　語学・文学』横浜国立大学 1983.
[5] 井上一郎「C. マッカラーズにおける孤独と愛」pp.97-109『長崎大学教養部紀要　人文科学篇』　長崎大学　1992.
[6] 江口裕子『現代アメリカ文学全集５』p.528,　荒地出版 1958.
[7] ヴァージニア・スペンサー・カー　浅井明美訳『孤独な狩人　カーソン・マッカラーズ伝』p.79,　国書刊行会 1998.
[8] Carson McCullers, *The Heart Is a Lonely Hunter*, First Mariner Books edition 2000. Boston.
[9]大谷恭子『共生の法律学』p.93 有斐閣 2000.
[10] 聾教育を考えるミラノ会議で、教育現場では手話を禁止して口話教育を進めることを決定した。
[11] Lennard Davis, editor, *Shall I say a kiss?: the courtship letters of a deaf couple, 1936-1938*，Preface xi,　Gallaudet University Press, Washington, DC. 1999.
[12] ・1937 年　第 18 回全米ろう大会、イリノイ州シカゴで開催。聾者を差別する政府機関に抗議する。フランクリン・D・ルーズベルト大統領、国家公務員に聾者採用を約束する。全米ろう協会、聾者の雇用機会を増加するために連邦郵政長官との話し合いが続いていることを報告。
[13] John Vickrey Van Cleve & Barry A. crouch,　*A Place of Their Own: Creating the Deaf Community in America*, p.168, Gallaudet University Press, Washington, DC.　1989.
[14]石田敏行「カーソン・マッカラーズ論」pp.115-122,『人文紀要　第２類　語学・文学』横浜国立大学 1983.
[14] 井上一郎「C. マッカラーズにおける孤独と愛」p.115『長崎大学教養部紀要　人文科学篇』長崎大学　1992.
[15] 福島智講演会論文集「盲ろう者と障害学」p.3, 東京大学先端科学技術研究センター　2009.
[16]. 1983 年 4 月にハーヴァード大学でウェルティ自身が講演をしたものをまとめた。
Eudora　Welty, *One Writer's Beginning*, Harvard University Press, 1984.
大杉博昭訳『ハーヴァード講演　一作家の生い立ち』　りん書房 1993.
[17]大杉博昭訳『ハーヴァード講演　一作家の生い立ち』pp.89-90　りん書房　1993.
[18]大杉博昭訳『ハーヴァード講演　一作家の生い立ち』pp.29-30　りん書房　1993.
[19] ソーントン不破直子『ユードラ・ウェルティーの世界』pp.8-10, こびあん書房　1988.
[20] 1965 年に アトランティックマンスリー誌(*The Atlantic Monthly*)に掲載したエッセイ“Must the Novelist crusade?”の中で述べている（143)。
[21] ソーントン不破直子『ユードラ・ウェルティーの世界』p.29, こびあん書房　1988.
[22] 河内山康子『ユードラ・ウェルティ　作品と人柄の魅力』pp.71-72, 旺史社 2004.
[23] Trent Batson and Eugene Bergman, *Angels and Outcasts,* Gallaudet University Press, Washington, DC, 1985. に収められている *“The Key”* の本文から。
[24]河内山康子『ユードラ・ウェルティ　作品と人柄の魅力』p.83, 旺史社 2004.

（受理　平成 23 年 3 月 19 日）